

Title	<紹介>島津忠夫著『和歌文学史の研究 短歌編』
Author(s)	海野, 圭介
Citation	語文. 1999, 72, p. 51-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68947
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

島津忠夫著『和歌文学史の研究 短歌編』

海野圭介

万葉の古典から現代短歌に至る千年余に及ぶ三十一文字の文芸の歴史を余すところなく綴り、連続する文学史としての俯瞰図を示された島津忠夫先生の大著が上梓された。本書は『同 和歌編』を受け、明治期以降の所謂「短歌」に関する以下の論考を収める。

- 一 近代短歌の黎明と『万葉集』 二 『みだれ髪』の成立と鉄幹・晶子 三 「明星」の試み―ひと夜語の共同連作をめぐって― 四 明治三十五年の歌壇―「明星」所載の鉄幹の見解を中心に― 五 「明星」の終焉と女流歌人たち 六 与謝野晶子と釈道空―近代短歌の評価をめぐっての試論― 七 太田水穂と若山牧水―明星詩派から自然派へ― 八 近代短歌の展開と『万葉集』 九 大正短歌雑考 (1)大正短歌史素描(2)『青海波』と『夏より秋へ』(3)九条武子と仏教 十 現代短歌史 十一 前川左美雄論(1)『植物祭』―現代短歌の始発―(2)前川左美雄と大和(3)前川左美雄の生涯―略年譜風に―(4)前川左美雄の生涯―近代短歌史上の位置― 十二 昭和十五年の歌壇と北原白秋の『黒松』 十三 女流歌人の変貌 十四 現代短歌の動向 結章 花鳥風月の歴史―結びにかえて― 付録 和歌文学史略年表 和歌編 短歌編 人名・書名索引 あとがき
- 「二」―「八」の「明星」と与謝野晶子を巡る問題は、中世和歌・連歌と共に先生の最も力を注がれている領域である。「二」では、『みだれ髪』所収「臙脂紫」「春思」の歌風分析から、同時代評「明星」掲載歌数の推移等の検討を重ね、『みだれ髪』に認められる晶子の歌

風は、その一面を添削の手も加えつつ鉄幹が発掘したものであろうとし、後の『舞姫』に晶子本来の歌風の完成を見る。更に、『みだれ髪』自体の編集も、晶子上京以前に既に鉄幹によって着手されていた可能性を示唆し、『みだれ髪』成立における鉄幹と晶子の役割を探る。「三」では、鉄幹、晶子、平塚紫袖による「ひと夜語」の連作前半の構想に『伊勢物語』を想定され、連句的な手法に合作の価値を見出される(51頁)。短歌の表現世界を『新古今集』『玉葉集』(90頁)、『徒然草』(96頁)に準え述べられる点と同様、島津先生ならではの古典作品への深い理解と史的展望に基づく指摘と言え、「古典和歌の研究者には是非とも『短歌編』を、近現代短歌の研究者や現代歌人には、是非とも『和歌編』を読んでほしいと思うのである」(207頁)と記される意図を察して余りある。

近代短歌史における女流の位置とその役割を定位する「五」、釈道空の晶子評を端緒に晶子の評価の問題、晶子晩年の文学史的意義を述べる「六」、「アララギ」歌人と『万葉集』との拘わりを辿り、多様な理解のあり方を説く「七」、「アララギ」の変容を同時代評を交え綴る「十」、前川左美雄の事跡を紡ぎつつ、現代短歌の始発としての意義を見出す「十一」等も、和歌文学とその表現の史的展開を考え、また、理解する上で貴重な指摘に満ち、後進を魅了する。

「十四」以降の現代短歌を対象とした諸論には、時に「歌人」島津忠夫の顔も垣間見せつつ、筆は俵万智にまで及ぶ。この章は、大阪大学における退官講義に基づいており、講筵の末席に列した稿者には懐かしい限りである。「同 和歌編」と共に角川源義賞受賞。(角川書店 平成九年九月 二七〇頁 一四、〇〇〇円)